



goal of this
plan



第2章

この計画が 目指すもの

ここでは、計画の柱となる

『**基本理念**』や基本理念を誰もが分かる
言葉に言い換えた『**合言葉**』を紹介するね!

また、地域の困りごとに対して具体的に
どういった行動をすればいいのか、
4コマまんがや実際に地域で活動している
方を取材した記事も紹介していくね!



basic philosophy

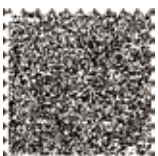
基本理念



「Challenge to わたし 私たちみんな ささ あ い 支え合いが生きる

この台東区地域福祉活動計画の根本になる価値観や目的を表しています。
台東区の現状や調査から捉えた課題に対して、わたしたちは何を目指していくべきかを
考え、設定しました。

未来に向けて果敢にチャレンジしていく気持ち。そして「誰かがやってくれるだろう」で
はなく、そこに暮らす人、働く人、それぞれができることに取り組み、つながりと支え合い
が生きるまちを創っていこうという強い気持ちを表現しました。



the Future

つながりと

まちを創^{つく}っていく」



合言葉

slogan

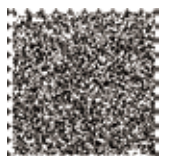
「つなげよう

HAPPYが

あふれる^{みらい}未来へ」

現代から未来へとバトンをつなげていくという思いを「つなげよう」という言葉に込めています。また「HAPPY」については「福祉」という言葉が持つ意味の「幸せ」と、台東社協のキャラクター名の「はっぴい」をかけて表現しました。

このフレーズを合言葉に、基本理念を実現させるための取り組みを推進していきます。



目指すべき地域の姿

基本理念の実現に向けて、第1章で示した3つの地域課題に対して、目指すべき地域の姿を設定しました。さらに目指すべき地域の姿の下に、日常のなかでも取り組めるような具体的な目標として、活動目標を3つずつ立てました。

地域課題 ①

困りごとを抱えている人、生きづらさを感じている人が増えている



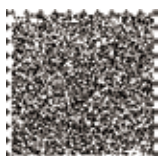
地域課題 ②

つながりや支え合いの力が弱まり、地域を見守る目や地域を支える仕組みが不足している



地域課題 ③

住民、地域活動団体などが知り合う機会が少なく、それぞれの強みを活かしきれていないため、地域への相乗効果が期待できない



should aim for

What the region

目指すべき地域の姿① →26 ページ

ささいな困りごとを受け止め、お互いに認め合うことができるまち

活動目標① 地域の困りごとに目を向けてみよう

活動目標② 地域に多様な方がともに暮らしていることを理解し合おう

活動目標③ 相談先につなげよう

目指すべき地域の姿② →34 ページ

地域につながる一歩を踏み出し、みんなで支え合うことができるまち

活動目標① 身近な人とのつながりに目を向けてみよう

活動目標② 自分にとって居心地の良い場所を見つけよう

活動目標③ 次世代につなげる方法を考えていこう

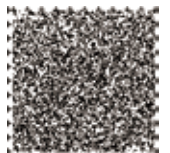
目指すべき地域の姿③ →42 ページ

住民、地域活動団体などが知り合い、つながり、一緒に未来について考えることができるまち

活動目標① 地域で活動している方（団体など）の活動内容を知ろう

活動目標② 誰につながる活動なのかを想像し、自分に
できることを見つけよう

活動目標③ 困りごとや気付いたことをみんなで共有し、
それぞれの役割について考えてみよう



「ささいな困りごとも受け止め、 お互いに認め合うことができるまち」

地域住民 山藤さんの話



区民の私たちに できること

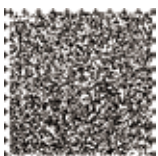


こといち
寿一ほっとライン(p.28)

- 普段とどこか様子が違ったら気にしてみよう。
→「最近あそこのおばあちゃん見かけないなあ」
「郵便物も溜まっている…」など
- 困ったときは家族や友達、近くに住む民生委員や社協などの相談窓口聞いてみよう。



- 関係機関と連携を図り、情報把握に努めます。また、状況を整理し、解決に向けて動きます。
- 住民が集う場に積極的に出向き、顔が見える関係性を構築します。また、より相談しやすい環境づくりに努めます。



【活動目標】

(1)地域の困りごとに目を向けてみよう (p.28)

(2)地域に多様な方がともに暮らしていることを理解しよう (p.30)

(3)相談先につなげよう (p.32)

企業や学校・文化施設など
に通う・働く私たちにできること



- 気になる方がいたら相談窓口連絡してみよう。
→「常連さんの身なりが最近荒れている」(お店)
「何度も通帳を無くしているお客さんがいる」(銀行)
「必要な手続きが難しそうなお客さんがいる」(学校) など
- だれでも参加・来所しやすいような案内や環境づくり(年齢や障害、言語などへの配慮)に取り組んでみよう。



台東社協の取り組み

- 気になる方へ適切な対応ができるように、スタッフ向けに対応方法のレクチャーを行うなど、相談支援を行います。
- 気になる方が適切な支援につながるよう関係機関と連携します。

地域活動者・団体や医療・
福祉関係者の私たちにできること

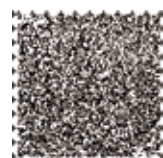


民生委員 牧田さん(p.32)

- 普段から地域や住民と関わる中で変化に気付けるようにしよう。
- 区民や地域の困りごとに対して相談に乗り、適切な相談先につなげたり、解決に向けて支援しよう。



- 地域活動者や団体からの相談を受け止め、解決に向けて一緒に考えていきます。
- 複雑化した相談ごとは、関係機関に呼びかけて話し合う場を作るなど、解決に向けて動きます。





活動目標(1) 地域の困りごとに目を向けてみよう

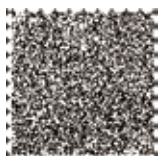
こといち
「**寿一ほっとライン**」 区民の「ささいな気付き」が地域を変える

一人の気付きから地域の活動が誕生

民生委員をしている寿一ほっとライン代表の横山さんは、日本全国で発生している災害をみて、震災時にこそ、日頃のつながりが生きてくると感じていました。そんななか、区から避難行動要支援者名簿ひなんこうどうようしえんしゃめいぼが横山さんに提供されたことで、「災害時に、わたし一人で名簿めいぼを使って声掛けするのは難しい。この名簿は地域の人に共有されていなければ意味がないんじゃないか。でも個人情報の兼ね合いもあるし、どうしたらいいのか分からない」と横山さんの不安はどんどん大きくなっていきました。

そんな不安を抱えているとき、台東社協の地域福祉コーディネーターと出会います。地域福祉コーディネーターへ相談すると、「他区で避難行動要支援者名簿ひなんこうどうようしえんしゃめいぼに頼らない、自主的な見守り活動をしている人がいるから、一緒に活動の見学に行かないか」と誘いを受けます。横山さんはその活動を見て、自分が暮らす町でも見守り活動をしたと思い、町会の役員に説明したり、活動メンバーを集めました。

しかし、町会役員の理解は得たものの、メンバーのほとんどが見守り活動をしたことがなく、不安の声があがりました。そこで10名ほどいるメンバーからコアメンバーとして3人で構成された小チームを作って、具体的な見守り方法について検討を重ねていくとともに、メンバー同士でシミュレーションをする等、※寿一ほっとラインこといちの活動スタイルを確立していきました。



こといち ※寿一ほっとラインの活動

活動内容は大きく2つ。一つ目は、見守りが必要な方を地図に記載する「見守りマップ作り」、二つ目は年に2回、二人一組で町内に住む高齢者宅を訪問することです。

見守り活動から生まれた新しい展開

個別訪問をしていくなかで、高齢者の方より「シニアクラブで災害時に使うトイレグッズが配られたけど、使い方がよく分からない」と多くの声があったことに気がきました。偶然メンバーの中に災害時の簡易トイレについて講座を学んだ方がいたので、その方を中心に「在宅避難時のトイレ問題を考えよう」というイベントをやるとういう話になりました。

記念すべき一回目のイベントのタイトルは「知っておきたい災害時のトイレのお話」となり、夏の訪問でまちの方に周知していきました。その結果、20名ほど参加者が集まり、町会役員も参加しました。

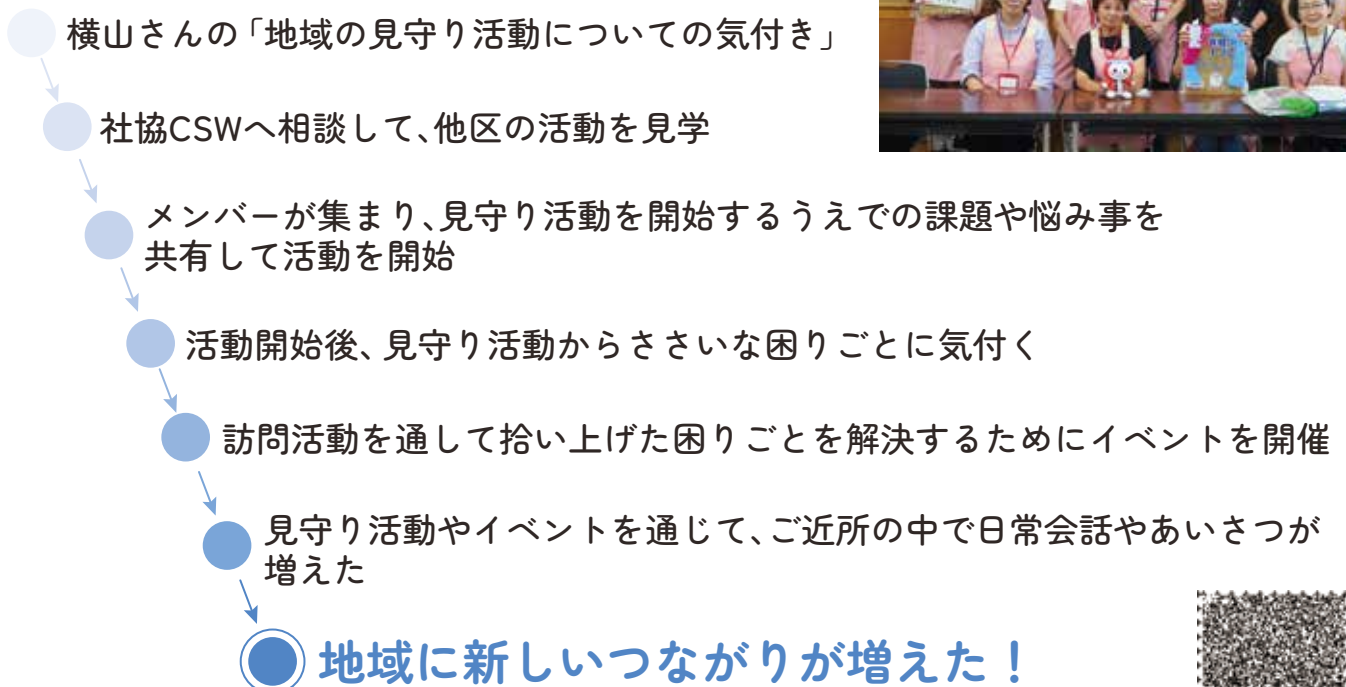


メンバーが感じる手ごたえ

イベント後、メンバー間の振り返りのなかで「日頃からのつながりが大切だと改めて感じた」「日頃、生活のなかで、お隣さん同士のあいさつや会話が增えた」などの意見があり、明らかに地域が変わってきていることをメンバーのみなさんも実感している様子が窺えました。「一歩踏み出すことが大切だよ!」と横山さんからのアドバイス。寿一ほっとラインが新しい地域の形になるかもしれませんね。



「ささいな気付き」から地域が変わるまで





「語り合う」って楽しい！
「つながる」って嬉しい！
日本語を学ぶ場から生まれた
住民たちの絆

みなさんは「台東区に住んでいる人」と聞いてどんな人を想像しますか？年齢、性別、出身地や家族構成、人によって様々です。そんな中、台東区では外国人住民の人口が増え続けています。言語や文化は違いますが、同じ台東区に住む住民同士。そんな住民同士の交流の場を取材しました。

「たいとう多文化共生まちづくりの会」

毎週金曜日の午前中、台東区に暮らす日本人と外国人が集まります。場所は寿地区にある^{ことぶきちく}厳念寺。地域に開かれた多文化交流の場です。「対話＝おしゃべり」を通して日本人と外国人というより、同じ地域住民として向き合います。

この日の参加者は、日本、中国、ベトナム、台湾、タイの方々。外国人参加者の多くは、「もっと日本人と交流したい」「日本の生活や文化を知りたい」という思いです。

この日の話題は「お盆」。「お墓参り」や「供え物」などに触れ、参加者の国や地域ではどうか紹介し合います。この良さは、違いを知り、楽しむこと。驚いたことに、ほとんどの国でご先祖様を^{とむら}弔う行事は4月に行うそうです。「中国じゃ暑すぎて夏は外に出られないよ!」「ベトナムは4月でも暑いから夕方からだけです」「えーそうなの!？」とお互いの初めて知る文化に盛り上がります。ある国ではお供え物として豚の丸焼きを^{ささ}捧げます。またある国では野菜と決まっているそう。「全然ちがうじゃん! (笑)」と参加者同士でお互いを知り合うことを楽しんでいるようです。

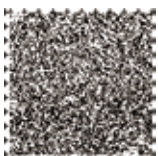
参加者の声

日本人参加者

- ・「会社員生活を終えて時間ができたので参加してみました。」
- ・「地域に住んでいる方と地域の話をするのが楽しいので、私はボランティアという意識はなく参加しています。」
- ・「外国人の方々が真剣に日本語を学んでくれる姿を見て感動しています。日本のことを知ってもらえるのって嬉しいですね!」

外国人参加者

- ・「もっと日本語を勉強したいと悩んでいました。そんな時に日本語教師の山藤先生からこの活動を教えてもらいました。」
- ・「はじめは日本語を学ぶために参加しました。でも今は毎週みんなに会えることが楽しくて金曜日が待ち遠しい!色んな話ができて嬉しいです。」



山藤先生に「最近の活動の様子」についてお聞きしました。

活動していく中で参加者たちに変化が…

「最近はこの活動のメンバーで区内のゴミ拾いをしたり、神社の朝市あさいちに出店したりしました。みんなで活動していく中で絆きずなが生まれています。この間は日本人参加者の方が携帯を買い替えるのに詳しくわからなくて、外国人参加者の方が携帯ショップまで付き添ってくれました。そうやって外国人の方に日本人もとても助けられています。お互いさま、助け合いですね。」

楽しいだけじゃない、相談し合える場に!

「日本人でも外国人でも良いので、今住んでいる地域でこのような会を作っていってほしいです。日常の場でいつも定期的に集まってお話しできる居場所が区内に必要です。そういった居場所同士で話題の共有やネットワークができてくると良いなと思っています。」



語り合う、学び合う場をいかに作っていけるかが、
多文化共生のカギになりそうです。



地域にはいろんな人が住んでるよね!
お互いのことを語り合う、学び合うことが
大事なものは共通しているんじゃないかな?





活動目標(3) 相談先につなげよう

近所で気になる人や、悩み事を相談してみませんか？

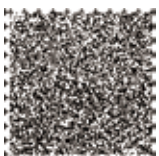
地域を優しく見守る民生委員

地域福祉活動計画の策定委員でもある牧田さんに、民生委員についての取材を行いました。



「地域のつながりが薄れてきている現代」

みなさんは近所に悩み事を相談できる人はいますか。近所のつながりや、家族、友人が少ないと相談するのは難しいですね。区民向けアンケートでも「近所の人と相談したり助け合える関係性を築けている」と回答した人は少ないことが分かりました。牧田さんも、「昔と比べ近所同士のつながりが少なくなっていますね」と話してくれました。



「民生委員」とは

牧田さんは、「地域の見守り屋さんかな」そう笑顔で答えてくれました。

民生委員は、厚生労働大臣から委嘱されて、住民に寄り添い相談に乗ったり、必要な手助けをしたりしてくれます。地域で困っている人と、その人を助けしてくれる人や場所を紹介する「つなぎ役」ですね。民生委員の歴史は1917年岡山県で誕生したと言われており、100年以上の歴史があります。そんな民生委員は、地域の方から相談を受けるため、個人の私生活へ立ち入ることが多いです。プライベートな情報を簡単に人へ話されたら困りますよね。そのため民生委員には守秘義務が課せられています。

区民の声

牧田さんは日頃から地域の方との交流を大切にしています。

そんな牧田さんが参加している地域活動の一つである「いきいき元気塾」を見学させていただきました。参加者の一人に牧田さんについて聞いてみると、「会う機会が頻繁にあるので、気さくに話ができます。また一人暮らしなのでいろいろ心配ですが、なんでも相談に乗ってもらえるし、近くにいると心強い存在です。」と話してくれました。



活動の中で受けた相談

一つ目は、「お隣のお家の配達物がしばらく外に放置されているのだけど、何かあったのではないかと」牧田さんへ相談があったケースです。牧田さんから顔なじみの地域包括支援センターの職員へ連絡をして、警察官が駆け付けるまでの対応がスムーズにいったケースです。

二つ目は、「ご近所に金銭管理が上手くいなくて、お金を貸して欲しいと来る人がいる」と相談があったケースです。日頃から台東社協の職員と交流していたため、台東社協の「あんしん台東」へ話をつないでもらい、社協職員による定期的な支援へとつながりました。

どちらのケースも日頃から住民に信頼され、関係機関と顔が見える関係ができていたからこそ、拾い上げられた相談なのだと思います。



民生委員の必要性

地域のつながりが少なくなっている現代において、民生委員の役割はとても大切になっています。なぜなら民生委員の活動が地域のみなさんの安心した暮らしにつながるからです。地域の困りごとやサポートが必要な人がいても、知らない人に相談するのは難しいですよね。民生委員が地域にいて、一人では解決できない困りごとを解決する一助になるのです。

民生委員は、民生委員自身が住んでいる地域を担当しているため、何かあったときはすぐに相談に乗ってもらえます。また、勉強会や情報交換を通して知識を深めてくれているので心強い存在です。何か困った時は一度相談してみてもいいかもしれません。

お住まいの地域の担当委員については下記へお問い合わせください。

台東区役所 福祉課 福祉振興係
電話：03-5246-1172



「地域につながる一歩を踏み出し、 みんなで支え合うことができるまち」

町会長 熊倉さんの話



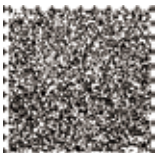
区民の私たちに できること



- 近所や同じマンションに住む人に会ったら「おはようございます」「こんばんは」とあいさつしてみよう。
- 気になる人を地域のイベントやサロンなどに誘ってみよう。
- 地域の防災訓練やお祭りなどの行事に参加してみよう。



- サロン活動などの居場所の立ち上げ、運営支援をするとともに、参加者同士が交流できるような場づくりを支援します。
- インスタグラムなどのSNSや広報誌を活用し、社協が関わるイベントや地域の行事を積極的に情報発信します。



【活動目標】

- (1) 身近な人とのつながりに目を向けてみよう (p.36)
- (2) 自分にとって居心地のいい場所を見つけよう (p.38)
- (3) 次世代につなげる方法を考えてみよう (p.40)

企業や学校・文化施設など に通う・働く私たちにできること



- 地域の防災訓練やお祭りなどの行事に参加してみよう。
- 町会や地域活動のポスターを貼るなど広報活動に協力してみよう。
- 住民が気軽に立ち寄れる場の提供など、自身が持つ特徴や強みを活かした取り組みを考えてみよう。



台東社協の取り組み

- 参加・協力いただけるイベントなどの情報を提供します。
- 台東社協が持っているネットワークを活かし、さまざまな関係機関と調整・連携を図ります。

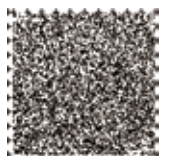
地域活動者・団体や医療・ 福祉関係者の私たちにできること



- 住民からの困りごとに限らず、何かをしたいと相談があったときに対応できるように、専門知識のみならず、地域の情報や相談先の情報を把握しておこう。
- 気になる人を地域のイベントやサロンに誘ってみよう。また、勉強会や茶話会などを開き、情報共有できる場を作ろう。
- 活動の見学や体験を受け入れ、協力者を増やしていこう。



- 公的制度やサービスのみならず、民間も含めた地域のさまざまな情報を集約し、相談内容に応じた適切な情報提供をします。
- 認知症の方、障害のある方、ひきこもりの方など、だれもが気軽に楽しく社会参加できる場を創っていきます。



活動目標(1) 身近な人とのつながりに目を向けてみよう



●認知症になっても忘れない人

台東区町会連合会竹町地区会長の熊倉さんに、住人とのエピソードをお聞きしました。

「ある日夜中に警察から電話がかかってきました。驚いて電話に出たら、認知症と思われる高齢の男性が保護されているから迎えに来てほしいとのことでした。警察も本人から名前や住所を聞こうとしましたが答えられず、しかしその男性は、町会長である私の連絡先は言えたそうなんです。急いで私が交番に迎えに行ったら、その男性が私の顔を見て涙を流しました。きっと知った顔が見れて安心したんでしょう。その後は無事に家に送り届けました。」

普段から同じ町会で顔を合わせ、つながりがあったからこそ、高齢の男性は熊倉さんの連絡先を覚えていたのではないのでしょうか。みなさんが年を取って、自分のことも分からなくなったとき、思い出せる身近な人はいるでしょうか。そういった方々とのつながりを大切にしていきたいでしょう！

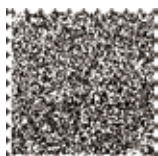
変わりゆくこの町、 変わらない

●つながりをつくるために

竹町地区は会社や事業所が多い地域ですが、地域にお住まいの方々に組織する町会活動も、活発に行われています。

「うちの町会ではいろんな行事をやっていきます。直近では夏休み中の子供たちに向けて、小学校で戦争について伝える会を開きました。秋にはサンマを焼いてみんなで食べる行事をしています。お祭りでは子供から大人まで神輿みこしを担ぎます。お祭りって誰でも参加していい地域の大事な文化です。私たちはその時期になると毎年どこかソワソワしています。」

地域の行事や活動が住民たちのつながりの場になっています！



●御徒町二丁目町会納涼盆踊り大会

夕日が沈む頃、櫓^{やぐら}から連なる提灯に明かりがぼっと灯り、たいとう音頭^{おかしまち}が流れ出します。気が付くと御徒町公園は色鮮やかな浴衣^{はんてん}、半纏^{じんべい}、甚平と、人々の笑顔があふれる伝統的な日本の夏そのものになりました。

開会のあいさつをしていたのは、御徒町二丁目町会町会長^{おかしまち}の大畑さんです。

「この御徒町二丁目町会の盆踊りは50年上続いています。ラムネ、ヨーヨー釣り、焼き鳥、ポップコーン、これらの屋台は町会の青年部をはじめとするメンバーで運営しています。櫓で太鼓を叩いてくれている彼女らも町会の面々です。」

屋台を見ると、町会の方々が声をかけ合いながらお祭りを盛り上げています。この屋台の売り上げは、日々地域の見守りやつながりをつくっている町会の大切な運営費になっています。



この時代に、 わたしたちのつながりを。

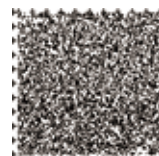
●災害が多い今だからこそ必要なつながり

「町会も加入する人が減ってきて、台東区は住民の出入りも多いですから、地域に誰が住んでいるか分かりづらくなってきました。普段はそれでも問題ないかもしれないけど、災害時は怖いですね。働きに来ているだけの人も多いから、東日本大震災の時も家に帰れなくなった人が多くて大混乱でした。被災時に活用する要支援者名簿^{ようしえんしゃめいぼ}を持つてはいるけれど、名簿^{めいぼ}には載っていない助けが必要な人がいるかもしれない。緊急時に助け合うためには、やっぱり普段からの備えと身近な人とのつながりが必要だっていうことを、みなさんに知ってもらいたいです。」



まずは近所の方との
あいさつから！

緊急時に助けになるのは普段からのつながり!





活動目標(2) 自分にとって居心地のいい場所を見つけよう

「真剣に!」「楽しく!」「自由に!」

住民がそれぞれの言葉で表現できる居場所

～「カーレット」を通じた地域交流～



自分にとって居心地のいい場所ってどんなところ？

この計画を策定するにあたってのアンケート調査で多く挙げたのが「孤独を感じている人が多い」「交流できるような場が欲しい」という声でした。

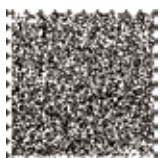
時代の変化とともに身近な人とのつながりが弱まっている今、どんな場が区民に求められているのか、どんなところに居心地の良さを感じているのかについて探っていきます。

住民主体の活動

取材に行ったのは住民主体で設立された「上野クリスティ」です。「上野クリスティ」では、定期的に住民が集まりカーレットを楽しんでいます。

取材当日は15名の方が集まっていました。開始時間になると、まずは準備体操です。輪になり、柔軟やストレッチなど、約20分かけてしっかりと準備をします。準備体操が終わると、いよいよカーレットが始まります。当日は4チームに分かれて、試合形式でチームごとの対戦を行っていました。試合が始まると真剣ムードに一変。「ここを狙った方が良い」「少し強めに投げたらどうか」など、チーム内で話し合いながら試合が進んでいきます。

試合が終わると休憩時間です。持ち寄ったお菓子やお茶を飲みながら一息つきます。おしゃべりを楽しむ人、お茶を楽しむ人、それぞれのペースで休憩時間を過ごします。休憩時間が終了すると、試合が再開です。約2時間の活動時間、みなさんそれぞれの楽しみ方で過ごされていました。



参加者からの声 ～休憩時間中の皆さんにインタビュー～

Q この活動の良いところを教えてください

- A**
- ・カーレットは「運動」にもなるし、週1回みんなとおしゃべりをする大事な「社会参加」の場になっている
 - ・カーレットを通じて誰かと話すということが認知症予防にもつながっている
 - ・緩やかな見守りにもつながっている
 - ・いつも来ているメンバーが来ていないと、『今日は〇〇さん来てないね。』と心配になる

みなさんの声の中から、「運動不足の解消」や「社会参加の場」、「認知症予防」、「ゆるやかな見守り」などのキーワードが出ました。良いと感じる部分は人それぞれ違うことが分かりました。

さまざまな選択肢の中から探す

今回取材をするなかで、カーレットを通して、交流を深めつつ、楽しみながらいきいきと活動されている方々に出会えたことで、自分にとって居心地がいいと思える場所があるといいと感じた一方で、自分に合った居場所を見つけるのは難しいとも感じました。居心地の良さは人それぞれですし、人間関係も重なることで敬遠する方がいるのは当然のこと。だからこそ居場所を求めている方には様々な選択肢の中から自分に合った居場所を見つけて欲しいと思います。

区内には、今回取り上げた上野クリスティ以外にも、沢山の団体が活動しています。ご興味がある方は、ぜひお気軽に台東社協までご相談ください。

〈お問合せ先〉

台東ボランティア・地域活動サポートセンター 電話：03-3847-7065
コーディネーター担当 電話：03-5828-7556

※カーレットとは

カーレットは2012年に日本で誕生した新しいスポーツで、「カーリング」に似たスポーツです。カーリングと決定的に違う部分といえば、競技をする場所です。カーリングは氷上で行うのに対し、カーレットは卓上で行います。写真にある通り、相手のストーンを弾いたり、円の中心に乘せるように力加減をコントロールしてショットしたりと、カーリングさながらの緻密な頭脳プレーが必要で、それがこのスポーツの魅力の一つとなっています。



活動目標(3) 次世代につなげる方法を考えていこう



神田先生の思いや活動が
地域に広がってきています！
まなび部の代表 神田先生の思いとは

神田先生の思い

長年小学校の教員として色々な家庭環境の子供たちや親御さんを見てきた神田先生。「みんながホッとできる場所にしたい。子供が生き生きと色々な人と関わり、体験をしてほしい」。そんな思いから始まったのが「まなび部」という子供たちの学習会です。神田先生の思いや活動は、サポーターとして参加している学生や、地域の方々へ広がってきています。今回は神田先生がどんな思いで活動をしているのか。そして、参加している子供たちや教員を目指しているサポーターの学生へお話を聞いてみました。



まなび部とは

毎週金曜日に本通寺ほんつうじで行われています。「時代のニーズに合った教育に対応していきたい」と神田先生は話してくれました。子供たちが自ら学習する計画を立てることで、学ぼうとする姿勢を育てていきます。また、「スピーチの時間」という取り組みがあり、子供たちのおのものが、テーマに沿ってみんなの前で発表します。そして、その発表に対して子供たちが質問をします。自分自身のことを堂々と表現してお互いの考えを認め合っています。

その他にも、自ら工作をして空気抵抗を学ぶ「科学教室」や実際の食事を通して健康や歯磨きについて学ぶ教室を開くなど、「体験」を通じた学びで子供たちを育てています。

まなび部の会場では、月に1回子供食堂を開催しています。子供食堂は、子供だけでなく、親御さんたちの憩いの場所にもなっています。

お寺のご住職と神田先生がつながったエピソード

実は、数年前、台東社協の地域福祉コーディネーター（以下CSW）が、まなび部の会場となっている本通寺ほんつうじのご住職から「子供食堂に興味がある」と相談を受けていました。相談を受けた当初、数回のお試し会を実施したものの、新型コロナウイルスなどの影響もあり、継続的な活動につながりませんでした。その後、運営スタッフから会場に関する相談を受け、CSWが本通寺ほんつうじのご住職とのお顔合わせの場をつくったところ、双方の思いがつながり、形となっていきました。



サポーターの学生へインタビュー

—まなび部のサポーターを始めた理由を教えてください。

「神田先生の大学での講義が面白く、興味を持ったことがきっかけです。連絡を取りお話を聞くと行動力がすごい!まなび部の方たちは生徒の個性を見ながら教え方を工夫しているので、参考にしています。」

神田先生は子供たちだけでなく、教師の育成にも力を入れています。学習会には教員志望の学生も参加しており、その多くが教員となり現場で活躍しています。まなび部を通して学んだ経験を大いに活かしてほしいですね。



参加者へインタビュー

—まなび部はどんなところですか？

参加者

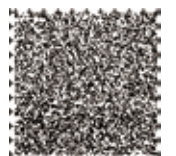
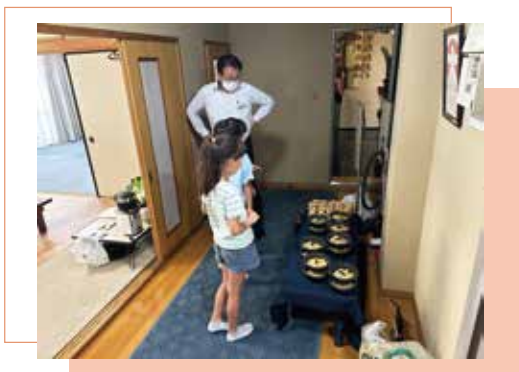
「友達と一緒に勉強できるから楽しい!」

保護者

「先生方がよく見てくれるので温かみを感じています。」

他学年の生徒同士でも楽しそうにご飯を食べていて、「ここで出るご飯はいつも美味しく、特にガパオライスが好き!」と口元にご飯粒を付けたまま話をしてくれる子供もいました。

時代の変化と共に、子供たちに求められる能力や資質は変わってきています。子供達にとってまなび部での経験は、これから成長し、いろんな人と出会っていく中で役に立つことでしょう。令和4年度に始まったまなび部の取り組みは、少しずつ地域へも広がり、今では企業や大学まで巻き込んで活動しています。台東区内には多くの方が地域のために活動してくれています。いろいろな方の思いや活動が地域とつながり、広がってほしいですね。



「住民、地域活動団体などが知り合い、つながり、一緒に未来について考えることができるまち」

地域住民 宮澤さんの話



区民の私たちに
できること



- まちの掲示板や地域活動団体のチラシを見てみよう。
- 何かをしたいという思いを周りに発信してみよう。



- ふくしつながりフェスタなどの地域イベントを開催することで、さまざまな団体の活動内容を知ることのできる機会を作ります。
- 「地域のために何かをしたい」と思った方の思いが実現するように、社協と一緒に考え、支援します。



【活動目標】

(1) 地域で活動している方の活動内容を知ろう (p.44)

(2) 地域活動の先にいる人を想像し、自分にできることを知ろう (p.46)

(3) 気付いたことをみんなで共有し、それぞれの役割について知ろう (p.48)

企業や学校・文化施設など
に通う・働く私たちにできること



- 地域のために何ができるのか、テーマや対象者、参加形態などを組織内で整理しておこう。
- 台東区内で開催されているさまざまなイベントに出店してみよう。

地域活動者・団体や医療・
福祉関係者の私たちにできること

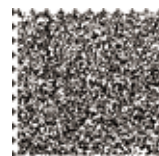


- 活動への理解が得られるよう、広報誌やSNSなどを活用し、分かりやすく発信していこう。
- 団体間や関係機関とのつながりを強化し、連携して地域課題の解決に向けて取り組もう。

台東社協の取り組み

- 社協が相談窓口として、地域の現状やニーズを踏まえた相談支援を行います。
- 同じ思いを持っている方をつなげ、お互いにHAPPYになれるコラボレーション企画を一緒に考えていきます。

- SNS活用術やチラシデザイン、活動に必要なお金の集め方など、日頃の活動に活かせる講座や勉強会を開催します。
- 地域で開催されているさまざまな会議や連絡会に参加し、地域の実情を把握するとともに、団体間のネットワーク作りにも取り組んでいきます。



活動目標(1)

地域で活動している方(団体など)の活動内容を知ろう



東京都美術館 × 東京藝術大学の取り組みにフォーカス

Creative Ageing

写真:中島佑輔

「Creative Ageing ずっとび」 ずっとび

「Creative Ageing ずっとび」という取り組みをご存じですか。これは、歳を重ねてからも「ずっと」美術館が身近な場所であることを目指し、超高齢社会に対応する活動として2021年より始められた、東京都美術館(以下、都美)と東京藝術大学(以下、藝大)が連携して取り組んでいるプロジェクトです。

「老い」=ネガティブなものとして捉えられることが多い日本において、そのイメージを反転し、Creative=創造的に、Ageing=年を重ねていくことを、ポジティブに捉えていこうという意味がこのプロジェクト名に込められています。

今回は都美の熊谷氏と藝大の小牟田氏を訪ね、プロジェクトの魅力や今後の展開について探ってきました。

都美×藝大が仕掛けるユニークなプログラム

「動く、遺影! イエイ! イエイ!」

これは、65歳以上のアクティブシニアを対象としたプログラムです。チラシには、「見る」「話す」「動く」「作る」など、からだ全体で美術館を楽しみ、今という瞬間を、未来につながる「動く遺影に見立てて残しましょう」と呼びかけてあります。美術館で「遺影」をテーマにしたプログラムという奇抜な組み合わせに心惹かれながら見学に出かけました。

当日、参加者はアート・コミュニケーター(※とびラー)とペアになって、一緒に作品を見て、その作品を体で表現し、さらに自分の人生を振り返



写真:中島佑輔

りながら体を動かすといった内容でした。一人ひとりが動く姿を、未来につながる「動く遺影」に見立てて記録し、記録した映像は後日参加者へ送られるそうです。

遺影というネガティブなイメージはどこへやら、終始参加者の皆さんは、笑顔で楽しんでいました。

「ずっとび鑑賞会」

これは、認知症が気になる65歳以上の方を対象としたプログラムです。美術館に足を運び、作品を見ながら、気付いたことや想像したり、感じたこと、思い出したことなどを話す作品鑑賞会です。

プログラムに参加しているアート・コミュニケーターが一つの作品を通して参加者に問いかけます。

例えば「この絵の中で気になったことはありますか?」その問いかけに対して、「これは日本人なのかなあ」と参加者が答える。「着物を着ているからきっと日本人よ」と別の参加者が答える。これをきっかけに会話が弾んでいきます。

その他にも絵が放つ色彩に感動している方、絵の中の登場人物の気持ちを想像する方、それぞれに絵を楽しむ様子が見受けられました。

(「ずっとび」のHPより一部抜粋)

東京藝術大学大学美術館 ずっとび鑑賞会(2023年)



写真:中島佑輔



今後の展開

「これまで台東区の医療・福祉機関と連携しながらプログラムを開発してきました。そのことを大切にしつつ、アートを介することで、創造的に年を重ねることができることをプログラムや情報発信を通して広めていきたいです。その先には美術館を入口に、人が社会とつながる回路づくりを担っていかれたらと思っています。」と語ってくれました。

今回は「Creative Ageing ずっとび」に絞ってお伝えしましたが、他にも様々なプロジェクトを行っています。一つは※「Museum Start あいうえの」。上野公園の9つの文化施設が連携し、子供たちのミュージアムでの探究的な学びと社会参加を目指しています。二つ目は※「とびらプロジェクト」。こちらは「ずっとび」と「あいうえの」の事業の基盤となっていて、アートを介して美術館でコミュニティを育むというものになっています。この3つの大きなプロジェクトが重なり合いながら、社会に変革をもたらそうと、楽しみながらも真剣に取り組んでいる姿を発見しました。

今後もどんなワクワクするプログラムが出てくるのか楽しみです。

※とびラー

とびらプロジェクトで活動するアート・コミュニケーターを「とびラー」と呼びます。東京都美術館の愛称「都美(とび)」と、「新しい扉(とびら)を開く」の意味が含まれた愛称です。年齢や職業など、様々な人たちが構成されています。とびラーはボランティアな活動ですが、美術館のサポーターではありません。学芸員や大学の教員などの専門家とともに活動する能動的なプレイヤーです。(公式HPより抜粋)

※とびらプロジェクト

広く一般から集まったアート・コミュニケーター「とびラー」と、学芸員や大学の教員、そして第一線で活躍中の専門家がともに美術館を拠点に、そこにある文化資源を活かしながら、人と作品、人と人、人と場所をつなぐ活動を展開しています。



※Museum Start あいうえの

すべての子供たちにミュージアム体験を。ミュージアム・スタートというプロジェクトの名前には、すべての子供が いい形でミュージアムでの体験をスタートしてほしいという思いが込められています。大人と子供がともにミュージアムを舞台に冒険ができることを実現するプロジェクトです。



東京都美術館 アート・コミュニケーション係長／学芸員 熊谷 香寿美氏



東京藝術大学 芸術未来研究場 ケア&コミュニケーション領域 特任助教 小牟田 悠介氏

福祉 × アー



活動目標(2) 地域活動の先にいる人を想像し、自分にできることを知ろう

●アートでコラボ! ユニクロ×障害福祉事業所

きっかけは台東社協が主催する「ふくしつながらリフェスタ」というイベントです。開催場所近くにユニクロ御徒町店かちまちさんがあったことから、「UTme!」を活用して障害福祉施設とTシャツをつくろうと思いました。ユニクロ御徒町店おかちまちさんはイベントへの参加とPRをしてくださいました。

今回はそのTシャツのイラスト作成に参加した、障害者施設浅草みらいどに通う、菊田さん、小川さんに話をお聞きしました。

— ご自身の絵がTシャツになると聞いたとき、どう思いましたか?

菊田さん

「平気!という感じ。俺に任せてくれ!と思いました。できたTシャツを見て嬉しかったし、達成できたと思いました。」

小川さん

「緊張しちゃう。心配だったけど、嬉しかった。出来上がりを見てまた嬉しくなった。」

— Tシャツを買ってくれた人に何か伝えたいことはありますか?

菊田さん

「人生いろいろあるけど、このTシャツを着て困難を突破してください!」

小川さん

「買ってくれてありがとう!Thank you!謝謝!メルシー!グラシアス!」

このTシャツの売り上げは、障害福祉施設への収入となります。企業×福祉のコラボがだれかのHAPPYにつながっています。

※UTme!(ユーターミー)

株式会社ユニクロが展開するサービス。スマホから簡単に誰でもオリジナルデザインのアイテムを作ることができる。



「浅草みらいど」の菊田さん(写真左)と小川さん(写真右)

地域で活躍する企業が続々と! 笑顔ひろがるHAPPYコラボレーション

●アップサイクルで資源もつながりも大事に!

珈琲焙煎処 縁の木×福祉事業所 KURAMAEモデル

— 白羽しらばさんが始められた「KURAMAEモデル」という取り組みについて教えてください。

『ゴミを捨てるのはもったいない。何か役立てることはできないか?』という思いから始まった取り組みです。地域のコーヒーごみを資源として、それを福祉事業所の方が集めて加工し、企業がそれを商品化するというものです。

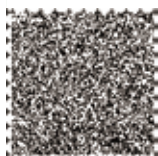
— 資源の再利用の仕組みに福祉事業所の参加を取り入れたのはどうしてですか?

理由はいくつかありますが、地域の人に福祉事業所に通う方々を知ってもらえたらいいなと思ったことです。障害のある人は時に『あの人がブツブツ言ってるから怖い』と、よく知らないがゆえに怖がられてしまうこともありますよね。でも地域を資源回収で回することで、『ブツブツ言ってる怖い人』という認識がなくなるんじゃないかと思うんです。

— 障害がある方の地域参加と、地域の人たちが「その人」を知るための良い機会になっているんですね!「地域共生社会」が求められている今、きっかけづくりに企業が関わってくれるのは、地域にとっても頼もしいかぎりです。



「珈琲焙煎処 縁の木」の白羽しらばさん



●地域への感謝の想いを!

ディスカウントショップ 多慶屋^{たけや}×地域活動

昔から多くの台東区民に愛され、海外からの観光客からも大人気なお店です。

— 台東区地域福祉活動計画の策定委員や上野まちづくり協議会の理事として、福祉や地域の委員会に積極的に参加していますが、きっかけは何だったんですか？

多慶屋^{たけや}は創業から御徒町中心にお店を構えてきたので、そのため台東区の中で商売をさせてもらっているという感覚がすごく強いんです。創業時から『地域・取引先との共存・共栄』という言葉を使っていて、会社の理念にも反映されています。そのような考えを基に、地域とのつながりをこれまで以上に強化していこうということで活動しています。

— 多慶屋^{たけや}さんは多くの地域イベントへの出店や開催、協賛などをしてくださっていますよね？

そうですね。台東区内の公園を月一で巡回して開催するコミュニティイベント『天(てん)』や『アーツ&スナック運動』の一環で、『しのばずホッププロジェクト』にも参加しています。ホップの収穫時には地域の人たちと一緒に取り組み、町の盛り上げや交流を行っています。

— 地域の人もそういった活動を通して多慶屋^{たけや}さんを知ったり、また行きたいと思ったりするのではないのでしょうか。

そう思っただけいたら嬉しいです。私共の独りよがりにならないように、社協や区などと一緒に取り組むことで、地域の方にも安心してもらえるんじゃないかと思います。そういったコラボでやっていけたらいいですね。社協が知っている地域のニーズを共有していただけたら、私共もそこに対して協力していけたらと考えています。



TAKEYA外観



多慶屋^{たけや}で取れたホップを使ったビール

台東区で広がっているさまざまな形のHAPPYコラボレーション。
その輪はどんどん広がっています。台東社協では「地域や福祉に貢献したい」という企業からの相談も受け付けています。

〈お問合せ先〉 台東ボランティア・地域活動サポートセンター 電話：03-3847-7065

たけや
多慶屋公式キャラクター
たけぱん



はっぴいも色々な企業と
コラボしたいな!



困りごとや気付いたことをみんなで共有し、それぞれの役割について考えてみよう

“思い”を形にする「つながり会議」

～この町に住むわたしたちが作る居場所アンダンテ～

「近所に気になる家庭があって心配。何かできないかな?」「地域の課題解決のために何かやってみたい。」

住民からのさまざまな声をきっかけに、つながり会議は行われます。進行役は台東社協の地域福祉コーディネーター。住民の思いに合わせて、住民や関係機関に声をかけ、参加者を集めます。

つながり会議では地域の気になることや地域活動について自由に話し合います。これまでもこの会議を通して多くの活動が生まれてきました。その中の一つに「アンダンテ」があります。ここでは「アンダンテ」の活動が生まれたきっかけや、実現に至るまでの準備、活動が誕生するまでの経緯について紹介していきます。

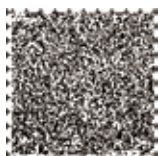


●「アンダンテ」の活動が生まれたきっかけ

「高齢になった家族の姿を見て、それまで仕事一筋だった親世代の人々が仕事を辞め、その後どのように過ごしているのかなと感じていました。自身の親だけではなく、地域にも同様の高齢者がいるのではないかと。そういった方々に仕事以外の楽しみや、職場以外の場があれば良いと考えました。」そう話してくれたのは、「アンダンテ」の立ち上げメンバーの一人である宮澤さんです。ただ、当初はどういった形で実現していけば良いのか分からずにいたと話します。そんなとき、アンダンテのメンバーから台東社協の地域福祉コーディネーターの存在を聞き、相談するところから話は大きく展開していきます。

●思いをつなぐ役割

台東社協の地域福祉コーディネーターには、相談者の思いに寄り添い、つなげていくという役割があります。初めて宮澤さんから相談を受けたときに、すぐにピピッとつなげる先がいくつか思い浮かんだと、相談を受けた職員は話します。宮澤さんの思いに共感でき、実際に地域にもそういった場を求めている人がいるということ把握していたため、この思いを何とか実現できないかと考え、宮澤さんにつながり会議への参加について提案しました。



●つながり会議開催

つながり会議では、宮澤さんを含めたアンダンテのメンバー3人に加え、台東社協の地域福祉コーディネーターの呼びかけで、民生委員、地域包括支援センター職員、保健所職員が集まりました。

宮澤さんは地域で気になる人に対して、自分たちの強みである音楽を通して何か居場所のようなものを作ることができないかと思っていることを話してみました。

すると、参加者からも「地域活動に参加しない、家から出ない、介護のサービスを拒否するという人がいて気になっている」といった声や、「外とつながることは、はじめの一步につながる」といった意見があがり、同じ思いを持っている方が身近にいて、実現に向けて進めていこうと背中を押されたように感じたと話します。

アンダンテのメンバーの中に音楽に関わる仕事や活動をされている方がいたということもあり、まずはお試して音楽を活用した場を作ってみようということになりました。



●当日の様子

会場はアンダンテのメンバーとのつながりのある酒屋の一角を借りて行うことになりました。その地域に住む人にとってはお馴染みの場所です。

つながり会議に出席してくれた民生委員や地域包括支援センター職員の呼びかけで参加者が集まりました。簡単な準備体操から始まり、童謡や昭和歌謡を中心に歌い、1時間のプログラムがあつという間に終わりました。

参加者からは、「昔近くに住んでいた人に再会できて嬉しかった。」「歌っていいわね。明るい気持ちになった。」といった声があがるなど、運営者を含めた全員の笑顔がこの活動の成功を裏付けていました。

●開催を振り返って

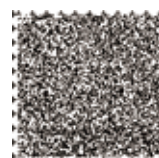
「まずは、無事に終えてホッとしている。これからも実施していくにあたり、次はもっと社会とつながりにくい人にも来てもらいたい。そして、参加者に合わせてプログラムの内容を考えたり、遠くまで出られない人に向けて場所や内容も考えていきたい。」と今後の展開についてもお話を伺えました。

団体名にもなっている「アンダンテ」という名前は「ゆっくり歩くように」を意味する音楽用語だと教えてくれました。まさにゆっくり地域に寄り添い、同じペースで一緒に歩いていく、この活動を象徴するような名前だと感じました。

この記事の中でも触れましたが、台東社協では地域の課題解決のために活動を立ち上げたいと思っている方のご相談に乗っています。また活動費についても「はっぴい助成金制度」を作り、活動の立ち上げをサポートしています。まずは一度、お気軽にご相談ください。

〈お問合せ先〉

コーディネーター担当 電話：03-5828-7556



台東社協はこれらの「重点事業」に

本計画の基本理念である「Challenge to the Future 私たちみんなでつながりと支え合いが生きるまちを創っていく」の実現に向けて、台東社協は以下の4点を重点的に取り組んでいきます。

相談対応力・支援力の強化

方向性

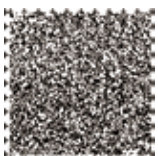
- ・台東区に生活している方や支援する方の活動圏域に合わせた地区ごとに、係を超えて社協職員一人ひとりが担当地区を持つことで、地域の変化に迅速に対応できるような組織体制の構築を目指します。
- ・成年後見制度の利用が必要な方々に対応するため、相談支援の強化、適切な後見人の調整などを行い、制度の利用を推進します。区と連携して「市民後見人」の養成を継続し、広報啓発活動を更に推進します。

事業

- ・全職員 担当地区制の導入（新規）
- ・属性や世代を問わない相談の受け止め
- ・アウトリーチ[※]による情報収集と支援
- ・成年後見制度・権利擁護事業の体制整備

写真

※アウトリーチ…支援が必要であるにもかかわらず届いていない人に対し、行政や支援機関などが積極的に働きかけて情報・支援を届けるプロセスのこと。



priority



住民・活動団体などの活躍の場づくり

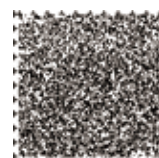
方向性

- ・ 認知症の方・障害のある方・ひきこもりの方など、支援を必要とする方の社会的孤立・孤独状態を予防及び解消するため、アート（文化芸術活動）を活用し、誰もが気軽に、楽しく社会参加できる取組みを推進していきます。
- ・ 就職に対して不安がある方、働く際に配慮やサポートが必要な方などが、短時間での就労・労働体験を得られるよう、台東社協が調整し、新たな雇用を生み出し、企業や商店などと連携してその輪を広げていくことを目指します。

事業

- ・ アート（文化芸術活動）の活用
- ・ 短時間就労・労働体験事業（新規）
- ・ 区民主体の福祉活動や居場所の立ち上げ・運営支援の強化

写真





もう2つの取り組みも
紹介していくよ!

広報力・地域のネットワークの強化

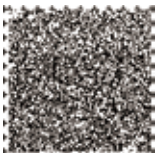
方向性

- ・ 専門家にご協力をいただきながら、社協のブランディング力を高めていくとともに、伝わりやすい広報について研究を重ねていきます。また、Instagramを中心としたSNSの情報発信にも力を入れていきます。
- ・ 各地区の住民を中心とした協議体を設置し、協議体の中で地域課題の共有や社会資源の調査、地域福祉活動計画の進捗や取り組み状況の確認を行うなど、担当地区の情報の把握・共有に努めていきます。

事業

- ・ 多機関との連携・協働事業の強化
- ・ 広報誌・SNSによる情報発信の強化
- ・ 家族会・当事者の会の立ち上げ支援
- ・ 災害ボランティアセンター設置への備えの充実

写真



priority



社協職員の能力の向上と弾力的な組織編制

方向性

- ・台東社協内部において、事例検討や勉強会を実施し、職員一人ひとりの能力やスキルアップの向上を目指します。また、外部研修にも積極的に参加し、見識を広め、区民や関係機関から信頼されるように努めていきます。
- ・持続可能な支援を目指すために、活動の内容や担い手の育成などについて整理し、住民相互の支え合いの仕組みを検討します。また時代の流れや社会情勢の変化を捉え、課題に対して適切に対応できるよう、必要に応じて組織を弾力的に編成していきます。

事業

- ・人材育成研修の実施
- ・各係における業務の見直し、整理
- ・有償ボランティアの持続可能な体制づくりの検討（新規）

写真

